

ひッ なっ  
何のつもり!!  
離しなさい!!

ティファは、どこかの施設に連れて行かれた。そこにはすでに多数の神羅兵とモンスターが待ち構えていた。世話になってるからなあ。神羅下級兵の性処理係になってもらおうと思っただけだ。グハハハハハッ

「おっと、ガキがどうなってもいいのさ?」  
「クッ……マリン……」

ティファの豊満な肉体にモルホルの触手が絡みつき、容赦なく締め付ける。  
「グッ……ウウッ」  
ティファが声を上げるのを、笑いながら眺める神羅兵たち。  
そこはさながら狂乱の宴の間だった。

「イヤッ! 離して! 離しなさい!」

彼女の、戦士としてはあまりに貧弱で扇情的な薄い装備はあっという間に剥がされた。ティファの頬が紅潮する。  
彼女が息をつく間もなく、モルホルの太々とした触手がグチュグチュと音を立てながら彼女の膣内にぬめり込んだ。



「ヒィッ! アアアッ!  
痺れ……る……」  
ティファのあえぎ混じりの  
悲鳴が響くと、神羅兵たちは  
手を叩いて喜び、色めきたった。

くっ  
ひっ卑怯よ!

先にマリリンを  
解放しなさい!  
ウッ  
アアアッ

ジュポ

強気な態度とは裏腹に  
ティファの淫乱な肉体は  
徐々に  
しかし確実に絶頂へと導かれていた  
神羅兵の嫌らしい笑い声と  
汚らわしい魔物の触手によって……

ネチ…

ジュポ

ネチ…



やあッ

「ティファちゃん、関わらないとこのままモンスターにイカされちゃうぜ！  
神羅兵の野次が飛ぶ。  
しかしティファの身体は、特殊な粘液によって痺れ、言うことを聞かない。  
「アアッ！ヒッ！  
だめえッ！」  
そんな奥……」

ブルンッ  
ブルンッ

「アアアアッ！嫌アアアアア  
イヤあッ！あッ！あッ！あッ！  
膣内出しだけはやめてえ！  
あああああッ！  
触手に押さえこまれたティファの身体が  
激しい快感にビクリビクリと痙攣した

くら：ああッ！  
やめなさい！  
みっ見ないでえ！  
見ないでえ！

ズッポッ  
ズッポッ

ズッポッ



「ヒッアアアアアッ  
魔物汁が……いっぱいっ  
お腹の中に……出てるわ  
ひあああああッーッ

嫌アアアアアッ  
ああはああッ

粘液まみれの膣内が激しくビクつき  
触手を飲み込んで放さないのだった。

ドク  
ドク

モルホルの粘液がティファの  
膣内と外にたっぷり注がれた。

ネチ…

ネチ…

ドク  
ドク



「ヒッ なっ 何!!  
何をすつつもりなの!!」  
「モルホルの触手がティファの胸に  
絡みつき、卑猥にうねっている。」  
「いや、ああっ やめてえ……!」

ああっ……  
触手は いやあ……!

ティファの柔らかく、張りのある  
白い乳房を、モルホルの触手が  
ネチネチと這いずり回る。  
取り巻いて見ていた神羅兵にも  
その柔らかいカサと弾力が伝わった。



「キヤッ! ま また  
粘液が...ウ...クッ」  
まるでパイズリのように  
ニチャニチャと卑猥な音を立てながら  
触手が乳房に絡み、スポスポと動く。

「やめて! やめてえ!  
嫌あああッ」

グジュッ

「コアア...っ! だっ だめっ  
せんなに揉まないで! ふああッ  
乳首コリコリしないでえ! やめてえ!  
（いっ嫌っ 耻ずかしい!）  
私、触手にいやらしくおっぱい触られて  
感じさせられてるなんて...!）」

ヌクヌク







グチュッ  
グチュッ  
グチュッ

「アアッ あはあッ はああッ!」  
ティファの甘い吐息には、徐々に艶っぽい  
声か混じり始めた。押さえきれない屈辱と  
快楽に、涙がこぼれた。  
（う…あ…このままじゃ私っ  
むっ胸…おっぱいだけで  
イカされちゃう! 駄目、そんなの絶対嫌  
憎らしい神羅兵たちの目の前で  
そんな屈辱を味わうなら、いつせ  
死んでしまったほうがマシだわ…!）

アアッ  
アアッ  
アアッ  
アアッ  
アアッ  
アアッ

グチュッ  
グチュッ  
グチュッ

（アアッだめっ  
イッばいっちゃう!  
おっぱいだけでイカされる!  
神羅兵の前で魔物の触手に  
イカされるっ!）



「うあああああつ ハアアアアッ!」  
「魔物サーメン出てるッ! アッアアアッ!」  
「おお、ティファちゃんがイッたぞ!」  
「おっぱいだけでイカされるなんて  
とんでもない淫乱だなあ! ゲハハハハ!」  
ドロドロと魔物の精子がティファの身体を  
犯していく。  
理性を持たぬ魔物にとっては、ティファの全身が  
陵辱すべき生殖器なのであった。

ヒッ  
アアアアッ!  
アアアアッ!

嫌っ  
アアアアッ  
ふああああッ!

グビュッ

グビュッ





ティファは屈辱にまみれながら、何人もの前で触手にイカされた。だが、観衆は誰もそれだけで満足しなかった。触手が再び激しく彼女に絡みつくと、ティファは恥ずかしがるかのように身じろぎした。

ヌチュ  
ヌチュ

ヌチュ

ヌキ...

ズム

ティファは少ない衣服を全て剥がれた。その白く豊満な肉体に、一気に触手が絡みつくと、嫌ああもう許してお願い...お願い...お願い...と、ひいひい...と、お願ひときわたくグロテスクな触手が、ティファのアナルをちろちろと撫で回している。

ヌキ...

ガッポッ

ヌル

ガッポッ

や...んぐらう...んぐらう...

ヌキ...

「嫌ああ、そこはやめて！おしり...あああああ...んぐらう...んぐらう...んぐらう...」  
お尻はだめえっ  
まだ濡れてもいないアナルにためらうもいなく触手が突き立てられる。口にも触手が進入した。穴という穴を魔物に塞がれ、ティファは声にならぬ声で抗った。しかしその声には、確かに媚びが含まれていた。







(アソコだけじゃなくてお尻まで……魔物に……っく、悔しい) そんな思いに反し、ティファの腰は触手のうごめきに合わせでなまめがしく動いていた。

悔しい

ヌル

ヌチュ  
ヌチュ

グジュッ

ヌチュッ

ユサ  
ユサ  
ヌチュ  
ヌチュ

ヌチュ

(あああ……膣内でざりざり当たってる……子宮口にも触手がざりざり来てる……！) おっ……奥にズンズン来てる……何……この感覚……ッ！)

「あっ……そんなに奥ヲかき回されたら私……ンゲッ！ ああッ……うぐっ！」  
膣とアナルを同時に激しく責め立てる。ただでさえ狭い内壁で、壁ごしに触手がざりざりとあたっている。

うぐっ……嫌……ふぐっ……んぐっ……ヒゲッッ

ユサ  
ユサ

ネキ

ネキ

ネキ……



「おーティファちゃん いい眺めだねえ！  
「おまんことケツから愛液だらだら垂らして  
はしたない女だなあ！」「ギャハハハハハハ！」  
（ララララ……）  
ティファを取り囲む神羅兵の野次に恥じらいつつも  
抗えない快楽にティファは沈んでいった。

ズル

ズチュッ  
ズチュ  
ズチュ  
ユサ  
ユサ

ズチュ

嫌っ  
ララ  
おまんこ  
おまんこ  
おまんこ  
おまんこ  
おまんこ

（また魔物にイカされる……！  
ごんな……人前で……  
あああああ……だめえっ  
もう……あああ……  
いっ……イック……おまんこ  
お尻でイック……  
あああ……イック……  
あああ……イック……）

グジュッ

ズチュ

（あああ……だめえっ  
それ以上……  
またイック……  
またイック……）

ズチュ

ユサ  
ユサ







陵辱の宴はとどまるところを知らなかった。体位を変えられ、アヌスまでも聴衆に丸見えになり、ティファの頬は快感とはじらいで赤々と染まった。さらに触手はティファの膣内と全身を犯しつくさんとばかりに這い回り、粘液で濡らした。

ズルン

アッ! アッ! もうやめて  
射精を終えた触手が抜かれると、すぐさま別の触手が彼女の膣内に入らずぶと突き刺さる。  
アッ! アッ! アッ! アッ!  
絶頂を終えたばかりのティファに、間断なく触手が襲い掛かるのだ。

ズルン  
ズルン





ハゲッ ハアッ!  
イツたばかりなのに  
さんなに激しくしちや  
だっダメえっ!

ズル  
ズル

ズルズル、ゲチュゲチュ、  
一本一本がティファを犯そうと  
意思を持ってうごめいてる。  
（さんなっ あっばいとあまんご  
同時に責めるなんてっ  
卑怯よっ!）

ネチ...  
ネチ...

ズル  
ズル

ヒッヒッ  
はあはあ  
あはあ  
あはあ

ズル  
ズル











ひっ ああああっ  
ひぐうううっ!  
精子がっ 子宮内に!  
また注がれてる

おっ おおおっ  
ごっ あがああっ  
ひいっ

ドッ  
ドッ

ドッ  
ドッ

触手の精液を再び  
膈内に注がれて  
ティファはまたイッた。  
神羅兵たちの目の前で……

イビューッ



観衆の数名が、たまらず、触手に犯されるティファに  
むしやぶりついた。  
「ティファちゃん、お手手がお留守じゃないか〜」

「ティファちゃんのおまんこが  
触手に犯されてるの丸見えだよ〜  
ほらみんな見てるぜ」  
（ここんな姿、もしくらウド  
たちに見られたら私……ッ）

ニヤニヤ

クハ、クハ

グハッ

ムニョ

く……く……ッ

ズイッ





「ティファちゃんのおっぱい  
プリンプリンで柔らかかくて  
でっけえなー」

「んっ  
んっ」

「んっ」

「ひい嫌ア  
アッ! イッたばかり  
なのアッ!  
アッ! な  
アッ! 激し...

「ズッ  
ズッ」

「んっ  
んっ」

「やっやだ  
大きき気にして...」

「んっ  
んっ」

「プリン」

「触手が再び激しく動き始めた。  
催淫効果の粘液が再びドロドロと  
ティファの腔中を犯し始めた。  
「ふああっもう許してえ  
見ないでお願い!」





クハッ  
クハッ

アアアッ

エサ  
ユサ

クハッ  
アアッ

クハッ  
クハッ

ムッ

揺らがないでえ！  
ヒソソ

ブルン

エサ  
ユサ

ヒソソ

ズッ  
ズッ



ドビュ〜

ドビュ〜

ドビュ〜勢い良く精液が放たれた。  
「ああっ 熱い精子たくさん  
お顔に出てるううう  
はあっ アアッ」

おまんこにも  
魔物せーしが  
たくさん出てるよお  
嫌あっ……

「淫乱ティファちゃんは  
そろそろチンポが欲しくなって  
きたんじゃないのか？ しゃんしゃん」  
ティファは内心を見透かされ、ぎくりと  
肩を震わせた。  
「せんな……あの神羅兵のおちんぼを  
欲しがってるなんて、私の身体……  
どうなっちゃうたの……」

ドッ…



小太りの、気味の悪い神羅兵が、  
サリ立つ陰茎を見せ付けながらティファに歩み寄った。

「最近戦闘続きでオフロに入っていないんだ。  
ティファたん、可愛いお口で  
ボクのおちんちんをお掃除してほしいな♪」  
「ビッ 嫌ア 汚い! 臭い やめてえ!」

ティファたんの  
おロマンコ犯して  
あげるからね  
愛情込めて  
しゃぶってね♪

ガッポッ

ひん嫌よ  
汚いな  
ムゲッ!

んぶッ!  
んおっ!

「おっぱい見えねえぞ  
ちやんと見せろ! 人質の  
ガキがどうなってもいいのか  
ああっ?」  
神羅兵が怒鳴った。  
「く...下手に反撃したら  
あの子の命が...」  
ティファは従うしかなかった。



ああー気持ちいいよ  
ティファたん  
ホクのロングチンポが  
喉奥までしっっかり  
届いてるね〜♪

ジュポ  
ジュポ

男の言うとおり、  
深々と喉にささる  
イマラチオに  
ティファは涙目に  
なった。

ジュポ  
ジュポ

ジュポ  
ジュポ

ゴブゴブ  
ゴブゴブ

んげっ

（ううっ 苦しい  
こんな変態男のものを  
くわえさせられるなんて  
嫌っ 嫌よっ）



ちやんと服上げて  
おっぱい見せて

ジュポ  
ジュポ

ウウッ  
ウフ  
ウゲッ  
ウッ

ジュポ  
ジュポ

ジュポ  
ジュポ

ジュポ  
ジュポ









ドクッ ドビュドビュビュッ!  
ほとばしる精液がティファの  
口内にたっぷり注がれた。  
「うっ ぐうううーっ!」  
口から溢れた精子は、胸につぼれ落ち  
彼女のエロさを引き立てた。

ドクッ...

ウッ...ハァハァッ  
ティファたん最高だよ  
精子全部ごっくんしてね  
アビビビッ

ううううっ  
ふっぐうううっ

(嫌ッ! 苦い...  
臭いよお...あああ  
喉奥まで精液で  
犯されちゃったよお...)



陵辱ショーは、場所を替え  
何度も繰り返された。  
ある時はかひ臭い地下の小部屋で  
ある時は血生臭く薄暗い実験室で  
そして今は寂れた教会で……

小太りの神羅兵がズボンを下ろして横たわった。  
その上に、ティファが強制的に跨らされる。  
「ウウッ、嫌っやめて……」  
「人質のガキがどうなってもいいの？ ああッ！」  
「……」  
従うより他はなかった。

ふぐっ  
ラッんん？

「ヒッヒッ  
ティファちゃん  
ほら、もっと腰使って動いて  
フヒッフヒッ」  
いい眺めだよ

（く……ウッ  
クラウドたちが早くこっせを  
見つけてくれれば……  
でもこんな姿、みんなに見られたく  
ない……！）





肥えたアタのような腹を揺らしながら汚らしい神羅兵がニヤニヤと彼女をなぶる。肢体にからみつく触手に身体を揺らされてティファがあえぎを漏らす。

（ソソッ また……このネバネバの液が……）  
……アアッ あっ 頭がボンヤリして……

んふっ  
んふっ  
んふっ

プル

イ  
イ  
イ

ズイ

（おっ おちんぽが子宮口に  
ゴソゴソ当てる……あ  
嫌な醜い男のおちんぽ  
奥にぐりぐり……触手  
嫌な奴に感じさせるん  
て……ウウッ）













ラッラんぐラッラッ  
くふラッラッラッラッ

ガッポッ

ビク

（あああひどい！  
子宮の中に知らない男の精液が  
たくさん出てるよおお  
本当に赤ちゃんできちゃー！）

膣内射精されて、ティファもイッて  
しまったことは、傍目にも明らかだった。  
「犯されてイクなんて、とんだ淫乱だぜ  
ギャハハハハッ」  
（ラ……クッ……）  
ティファは恥辱を感じながら、  
さらに激しくイッた。

ドイッ  
ドイッ…

ドイッ

「ティファちゃん最高だよ  
よかつたよ」  
「ホクのおよめさんにしたいな」

ビク





薄暗く、生臭く、ほこりっぽい部屋……。目隠しをされて連れてこられたのは、どこかの地下室のようだった。

そこでティファを待っていたのは、さらなる恥辱、それから……。強烈な快楽だった。

「グヘヘヘヘヘ、ここならティファちゃんも野次馬を気にせず、えっちに没頭できるだろ」

「わっ、私がこんな行為に没頭したりするわけがないでしょう！」

「ふざけないで！」強がるティファに触手が絡みつき

「あっという間に足を開かせた。」

「くっ、また膣内……。嫌！ やめなさい！」

「はっ、入ってくる……。ふっあああああっ！」

ティファの秘所は、彼女の言葉に逆らい触手の侵入に悦びヒクついていた。

「ウッ……。いやあ！ おっ、おまんこっ、やめてえ、ああっお尻まで……。やめて！」

「更に、太い触手がアナルにも侵入した。ティファちゃん、そのエロいクチマンコでじっくりしゃぶってね」









（ううぐっ！）  
膺内 お尻 お口全部  
激しくさわられたら また私  
イッチやうかも……  
魔物と神羅兵にイカされ  
る……嫌！嫌アアア！

チュポ  
チュポ

フケッ！  
チュポ  
チュポ

チュポ  
チュポ

ズン  
ズン

ウケッ

ウケッ

ウッ

オウッ

ズン  
ズン





「ウウッ! 出すぞお  
ティファちゃんのおまんこに  
精子注射込むぞお!!」  
「ムゲウウウウウウウウウ  
（ひっ）やめてええええええ  
イクイクイク! また  
いっちやうよお!」

キュポ

グググ  
グググ

キュポ  
キュポ

キュポ

ゴッ  
ウッ!

キュポ

ズン  
ズン

ズン  
ズン







ほおら挿入するぞお  
ティファたんのおまんこに  
おちんぼハメてあげる  
からねえ  
ラウツ

ズ  
ア  
ア  
ア...

汚らしい神羅兵が代わる代わる  
ティファの前に立ち彼女を  
もてあそんだ。  
この男も、言うが早い  
ティファの意見も聞かずに  
膣内にどす黒い陰茎を  
挿入した。

ゴリ  
ゴリ

触手と、男の陰茎を  
幾度も受け入れたティファの  
秘所は、ヒクつき、次の挿入を  
待ちわびているようだ。

ズ  
ア  
ア...

ズ  
ア  
ア...

ひいひい  
嫌ああ  
やめて嫌ああ

ズ  
ア  
ア...





フヒッ ティファさんの  
オマンコ最高だよお  
ギョウギョウ締めて  
きてるよお

く……う  
逃げなまや！逃げなまや！  
このままじゃ私  
汚されるばかりだわ！  
逃げなまや……！  
しかし手足はビクとも  
しないほど、強く拘束  
されている。  
どうすればいいの！  
このままじゃ私……！

ズチュ  
ズチュ

パン  
パン

パン  
パン

アアアアッ  
嫌あアッ









「あいつ、アアアッ  
もう出さないうで！  
イクウウウだめえっ！  
「フッ！ウゴッ！……  
ウウッす、凄いやマン」の  
ひだひだが絡んで  
締め付けてきてるよま」

オピュッ

お腹の奥に  
精子がっああっ

オピュッ

「あああああ嫌っ  
嫌あああああ嫌っ  
汚らしい男によって  
望んでもない膣奥に  
種付けされたてイッ  
だのに身体を激しく  
反神羅組織のアラン  
今や完全に神羅に飼  
雌豚……あは肉便器  
であつた。



触手に陵辱されイカサられ、  
しつとりと淫らに濡れた身体で横たわるティファに  
休む間もなく数名の神羅兵がむしゃぶりついた。

「ヒッ 嫌あ 何なのっ!  
いっ 嫌あ こんなに大勢  
相手にするなんて 無理よっ」

「ケへへッ、穴は足りてるだろうが!  
オラッ! ケツも犯してやるから足開けよ!」  
「じゃ じゃあボクはお口でしゃぶって  
もらおうかな フヒッ!」

「ふあああ あっ そんないきなりいっ!  
ひいっ! ウッ ムゴッ!」

「ううっ! なんて柔らかくて  
弾力のすばらしいおっぱいだ!  
ムチムチしているじゃないか!  
ある者はティファの膣に挿入し、別の者が  
ティファのアナルを犯し、もう一人が  
ティファの口内を陵辱していた。  
ムチムチとした体中を舐め回され、  
翻られるティファ。

「嫌なはずなのに! どうしてっ?  
どうして感じちゃうの!」

彼女の頬を悔し涙がこぼれた。

ゴムッ

ぼくっ

プルン

ズゴッ

じゅるっ  
じゅるっ

ズムッ

オラッ



ゲムム...

(ああうっ  
おちんぽいいい おちんぽ  
気持ちいい...!!  
触手より太くて固いおちんぽが  
子宮の奥の奥までずんずん  
響いてくるうう!)

オラオラ

ツツ  
ツツ

ウウツ

ズゴゴッ

ぽくっ

ブルン

じゅるっ  
じゅるっ

ズルン





「ウウッ! ウッ! ……」  
「ああ…おまんことお尻の中の  
おちんぼが擦れあってる…!」  
「内壁がゴリゴリ圧迫されてる…!」  
「気持ちよくてたまらないよおお!  
おまんことお尻がとろけあうみたい!」  
「へへッ、ティファちゃん、  
気持ちが良いすぎて泣いちゃったのかな?」  
「そっ、そんなわけないでしょ!」  
「ティファちゃん、お口がお留守に  
なってるよお」  
「ムゲッ!」  
「くっ、いけない…  
私を感じてるなんて、絶対に  
悟られるわけには…!」  
「ティファがそう強く思えば思うほど  
彼女の内壁は敵の侵入に悦び  
愛液をしたたりさせるのだった…。」

ンゲウッ!

アウッ

ズム

ズンッ  
ズンッ

ズンッ

ズム

ズンッ  
ズンッ

プルン

ウッ

オオッ

ンウウウッ

ガポッ

アッ





